現実を書き換えることはきっと簡単なのだろう――――

望めば誰もが、目の前のリアルを変革できる。それこそ、ペンを持った誰かがノートに幼稚なラクガキを描くように。誰かの稚拙な幻想が、フィクションをノンフィクションに変えるのだ。

未那月刀剣術師範代並びにＡＲＡＭｓ（アームズ）代表・未那月美紀（みなつきみき）著『ＭＹ ＨＥＲＯ』より抜粋。

００

「これでようやく……」

神室透真（かむろとうま）は、全能感に満たされていた。

指先を動かす度に「完成」に近づいていくソレの姿を前に、笑みを漏らしてしまうのも仕方のないことであろう。

五〇〇以上のパーツから成るヒト型の内部骨格と、全身を覆う強固な装甲群。

両腰には二丁の突撃機銃を備えながらも、全身が刃物のように研磨された姿は機械仕掛けの武者を思わせた。

翡翠色の相貌を備えた、そのマシーンの名は、

「何を作ってるのよ、アンタはッ――――！」

脳天を突き抜ける衝撃は浸っていた空想を悉く破壊して、透真を現実へと引き戻す。

「うがッ!?」

そのまま透真は前のめりに転倒。そこに広げてあった工具諸々をばら撒きながらに額を打ちつけた。

ばら撒かれた工具は、プラスチック用片刃ニッパー（税込五二八〇円）、スポンジヤスリ六〇〇番から一二〇〇番（全て合わせて税込七一五円）

そして、透真が丹精込めて作り上げたプラモデル。一／一〇〇（百分の一）〈エクステンド〉（税込一二八〇〇円）だ。

「ッッ――――！」

透真は咄嗟に身を捻り、落下するエクステンドを受け止めた。床に衝突するまでの距離はわずかに数ミリ。

これはギリギリセーフといったところか。
アンテナや装甲の先端部など、折れやすい箇所が無事であることを確認した斗真は、振り返って、自らを背後から殴りつけたであろう人物を恨めしそうに睨んだ。
「痛っ……いきなり、何すんだよッ！」
「……」
そこに立つのは、ボブカットの少女だ。
丸っこい猫目をめいいっぱい細めた彼女は、透真に負けじと睨み返してきた。
「いきなりも何も、学校に来てまで玩具で遊んでる斗真が悪いに決まってるじゃない」
そう、ここは私立星宮（ほしみや）高等学校・二年一組の教室であった。
やいのやいのと言い合う二人の元にはクラスメイト達の視線を集めるが、それもほんの一瞬のこと。「またクラス一のバカと委員長が何か揉めてるんだ」と理解した全員が、見飽きた日常から視線を逸らす。
「玩具って……だから何度も言ってるだろ！　この〈エクステンド〉ははただの玩具じゃないって！」
透真の目の下にはマーカーペンで引いたような濃いクマがあった。これは寝る間も惜しんで〈エクステンド〉を制作していた故のものである。
キットを手に入れから今日で三日だ。一分でも、一秒でも早く完成品が見たかった透真は空き時間を見つけては、それが何処であろうとも制作を続けていた。
それだけの熱意と愛情を注ぎ込んだのだから、〈エクステンド〉は既にただの玩具に非ず。誠心誠意作り上げた一つの作品、或いは透真自身の分身とさえも言えた。
けれど、そんな想いが他者に理解されるわけもなく。
「何言ってるの。こんなの、ただの玩具じゃない」
彼女には徹頭徹尾、正論で返されてしまった。
終いには「学級委員として、生徒指導に報告しなくちゃならない」と脅されたので、斗真は泣く泣く広げた工具を片付け始める。
「畜生……ヒバチは男のロマンってもんがわからねぇからなぁ……」
「聞こえてるわよ。あといい加減、ヒバチって呼ぶのやめてよね。小学校の頃の仇名で私のことを呼ぶのなんて、もうアンタくらいよ」
ヒバチ。――――基い、藤森陽真里（ふじもりひまり）は不服そうに眉根を寄せた。
二人の関係性を有体に言い表すのであれば、「腐れ縁」或いは「幼馴染」とするのが一番適切なのであろう。けれども、その性格は鏡合わせのように違っていた。
首元が苦しいからという理由で制服のネクタイをダラりと緩めた透真と、学校指定のブレザーを規定通りにキッチリと着こなす陽真里。二人の対称性は制服の着こなしの一つにも現れていた。

「けど、何というか意外よね。中学ではあんなに荒れてたアンタが、更生して、ここまでオタク趣味にのめり込むなんて」
「……んだよ、悪いかよ。今や日本の漫画やアニメーションは世界に誇れる文化なんだぜ」
「別に卑下する意図はないわよ。私だってゲーム好きだし、ソーシャルゲームのガチャで推しが出るか出ないかに一喜一憂してるくらいだもん。……けどね、透真の場合は、のめり込み方が極端だって言ってるの！」
確かに透真は、小さい頃から何かとハマりやすい方であった。
中学の頃とはガラリと様変わりした自室のことを思い出す。
壁に貼ってあったグラビア写真はアニメのポスターに様変わりしたし、筋トレ器具は軒並み、漫画雑誌やライトノベルに置き換わった。
先月には遂にプラモデルやフィギュアを飾るためのショーウィンドウを購入する程だ。
「色々買ってるみたいだけど、お金、大丈夫なの？」
「うっ……！」
痛いところを突かれて言葉を詰まらせた。
一ヶ月分のバイト代を全て趣味に費やしたことが彼女にバレれば、やれ「貯金しろ」だの、やれ「もっと計画的に使え」だの、お説教を食らうことは目に見えているのだ。
「だいたい、この子は幾らぐらいしたの？」
陽真里は、片付けようとしたエクステンドをヒョイと摘み上げて、訝しそうに尋ねた。
「おい、ヒバチ！　そんな雑な持ち方すんなよ！　下手に触って、壊れたら俺の三日間の努力が！」
「ヒバチじゃなくて陽真里だって言ってるでしょ！　けど、そうね……確かにすごく精密だし、ざっと三〇〇〇円ってところかしら？」
「えっ……いや、それは」
「五〇〇〇円とか？　それともまさか七〇〇〇円もするんじゃ⁉」
税込一二八〇〇円だなんて口が裂けても言えるわけがない。
透真の額には冷や汗が浮いて、次第に顔色も青くなってゆく。
「えっ、えっーと、半額セール品で五〇〇円くらいかなぁ……あはは……」
「うん、アンタのその表情でだいたい分かったわ。多分、一〇〇〇〇円くらいしたのね」
当たらずしも遠からず。
呆れ返った陽真里は重苦しく嘆息を吐いた。
「私だって、アニメや漫画の中のロボットを手に取ってみたいって気持ちは十分に分かる。ほんの一時でもフィクションにのめり込みたいって気持ちもね。だけどさ、この〈エクステンド〉の場合――――」
ほんの一瞬、校舎が揺れた。次いで、開け放たれた窓からは轟々とした風が吹き込んでくる。
「……はぁ、また来たみたいね」

外を見れば何か巨大なシルエットが滑空し、校舎を飛び越えて行ったのだと理解できる。
けれど、クラスメイトの誰もがシルエットについて反応をする訳じゃない。まるで、それが彼らにとっての「当たり前」であるように。
高度を下げたシルエットは、やがて大通りへと足をつけた。全身のサスペンションを忙しくなく稼働させながらも着地しようとする一部始終は、透真たちのいる教室からでも伺えた。
ヒト型の内部骨格と全身を覆う強化装甲群。
機械仕掛けの武者を思わせ、据えられた双眸を翡翠色に煌めかせた姿は、陽真里の手にしたプラモデルをそのまま大きくしたようであった。
いいや、それは違う。
正確に言えば、あの巨大なマシーンを元に一／一〇〇〈エクステンド〉のプラモデルが作られ、販売されたのだ。
「だけどさ、〈エクステンド〉の場合は、」
陽真里は戦闘体制を取ろうとするマシーンを見つめながらに、途切れていた言葉の続きを紡ぐ。
「――――本物がすぐそこの現実に居る。ノンフィクションの産物じゃない」

01

頭部の装甲に「ＥＸＴＥＮＤ／００」と印字されていたから、鉄の巨人はそのまま〈エクステンド〉と呼ばれるようになった。
正式名称・所属は共に不明。全長は三〇メートル前後、重量は五〇トン程度と推定。
いつ、どこで、誰が、何の為に建造したのかも、正式な発表は未だ為されていない。
気まぐれに上空から飛来して、主に東京の星宮（ほしみや）市に降り立つ〈エクステンド〉について判明していることは、詰まるところ何もないのである。
けれど、「その巨人が何を為すか」だけは、この世界の誰もが知っていた――――

◇◇◇

空から降って来た〈エクステンド〉。そして、向かいの空からも同スケールの何かが迫って来る。
〈エクステンド〉と同じように大気を揺らし、同じように市街地に影を落としながらに。けれど、着地の仕方だけはまるっきり正反対であった。
〈エクステンド〉が接地の瞬間に全身を折り、衝撃を殺したのに対して、あとから現れたソイツは自らの巨体を街に叩き続けたのだ。

ビルを薙ぎ倒しながらに粉塵を巻き上げる様は、自らの力を誇示しているようであった。
そして、粉塵が晴れた先にソイツの姿が明らかとなっていく。
まず着目すべきは両腕に備えた巨大なハサミのシルエットである。次いで、真っ赤な甲殻が全身を覆っていることに気付かされた。
「――――今月はザリガニの怪獣なんだな」
クラスの誰かが、そんな風に呟いた。
口に泡を蓄えながらに〈エクステンド〉を威嚇する姿なんて、小さい頃に池で捕まえたザリガニそのままだ。
〈エクステンド〉の明滅するカメラアイと、複眼が集合した故に黒い球体状を成したザリガニ怪獣の瞳が睨み合う。
実際には睨み合っていないのかもしれないが、少なくとも透真（とうま）にはそう見えたのだ。
「負けるなよ、〈エクステンド〉！」
あのハサミから繰り出される挟撃を掻い潜り、分厚い攻殻をどう打ち破るか？
その瞬間を見逃さないために、透真は窓際へと駆け寄った。身を乗り出しながらに興奮を隠しきれない自分の姿は、テレビの特撮番組に食い入る子供のようにも見えてしまうのだろう。
だが、そんな姿は陽真里（ひまり）を怒らせる要因になり得た。
「こらッ！　何見入ってるのよ！」
またも透真の頭には、彼女の鉄拳制裁が振り下ろされる。
「ッッ……痛ってぇ！　こんにゃろう、また叩きやがったな！」
「叩きもするわよ。休み時間にこっそりとプラモデルを作る程度ならまだ理解できるし、〈エクステンド〉が好きだって気持ちも尊重する。だけど、暴れ出すところを楽しそうに観戦するのは不謹慎でしょ！」
「暴れ出すって……〈エクステンド〉はいつも謎の怪獣から俺たちの街を守ってくれるじゃねぇか。それに、あの辺はシェルターも多い地域だから被害だって少ないだろうし」
「言い訳しない！　被害が多いとか、少ないとか、そういう問題じゃないでしょ！」
実際、陽真里の持つ価値観の方が正しく、模範的なのであろう。
だが、透真たちの中では「巨大ロボット〈エクステンド〉と謎の怪獣が現れては殴り合いを繰り広げる」という非現実的なフィクションが、半ば現実的なノンフィクションへと変わり始めていた。
およそ三年前。――――初めて〈エクステンド〉と怪獣が現れ、街で乱闘を繰り広げた際には自衛隊の戦闘機が飛び出すは、世界中のメディアがこぞって透真たちの町を訪れるはで、大パニックへと発展した。
けれど、「喉元過ぎれば何とやら」というのが人の性である。
この三年間で避難マニュアルが浸透し、避難用シェルターや耐怪獣建築の頑強なビル群が増

えるに連れて、次第に〈エクステンド〉に抱く危機感を忘れていったのだ。
ひと月に一度は怪獣が現れ、〈エクステンド〉が多少の苦戦をしながらも倒していくというテンプレ通りのシナリオと、事態が起こる頻度も、危機感を喪失させる要因になり得たのだろう。
おまけに〈エクステンド〉や怪獣について、世界有数の研究チームがどれだけ調査を続けても、新たな事実が何一つ判明しないのだから、「あれは、ああいう概念（もの）なんだ」と受け入れ、適応することを多くの人々が強いられた。
その少し歪な現状は、透真のクラスメイト達からも伺える。
スピーカーから流れた放送の声通りに廊下に整列しながらも、「ラッキー。午後の授業が潰れる」程度にしか考えていない生徒が半分。
行きつけのショッピングモールや普段使っている駅が踏み潰されないか心配する生徒がもう半分。
そして透真のような一部の生徒が、〈エクステンド〉がどのような奮闘を魅せてくれるかに期待している。
「それにさ不謹慎どうこうを言い出すのならなら、あの人はどうなんだよ？」
透真は彼女をなるべく刺激しないよう注意しながらも、校庭の方を指差した。
そこに在るのは、拡声器を手にした女性教員の姿だ。
『――――頑張れ〈エクステンド〉！　ド派手なのをブチかましてやりなさいなッ！』
先程の透真の姿がテレビの特撮番組に食い入る子供なら、ありったけの声援を届けようとする彼女の姿はさながらヒーローショーに盛り上がる司会のお姉さんのようであった。
見ようによっては透真たち以上に不謹慎である。加えて彼女は今年で二十七なのだ。
そんな大人を、陽真里という生真面目な幼馴染が許すわけもない。両手を口元に添え、拡声器に負けないほどの大声を張る。
「何ふざけるんですか、未那月（みなつき）先生ッ！」
その声に養護教諭の、未那月美紀（みなつきみき）は「ビクン！」と肩を震わせた。
『あはは……そこに居るのは藤森（ふじもり）委員長に神室（かむろ）くんではないか。放送にしたがって避難しなくてはダメだろうに！』
「今更、教師らしい振る舞いで誤魔化そうとしたって無駄ですからねッ！　それに生徒の避難を促すのも貴女の仕事でしょう！」
『うぐっ……流石は謹厳実直な私の可愛い生徒だ。やはり小手先の口先三寸は通じぬか』
「とにかく早く戻って来て下さいッ！　先生がクビになっても、私たちは知りませんからねッ！」

陽真里は溜息を今日一番の重苦しい溜息を吐き出した。
「うん……流石にあれは未那月先生が悪いし、ヒバチの気持ちも分かるかもな……」
透真は自身のことを「まぁまぁの変わり者」だと認識しているし、お節介焼きの陽真里のことは「まぁまあの物好き」だと思っている。
けれど、あの担任だけは「まぁまぁ」という言葉で収められる程度の変人ではなかった。
昨年度から赴任してきた彼女が起こした問題は数知れず。愛車のシボレーカマロで校庭に突っ込むは、カツアゲされている生徒を助ける為に他校の不良をボコボコにするはで、一昔前の学園ドラマに出てくるヤンキー教師そのまんまである。
今日みたく拡声器を持ち出して〈エクステンド〉を応援するなんて奇行は可愛いもので、昨年度には廃部寸前だった演劇部と映像研を巻き込んで〈エクステンド〉を題材とした百二十分にも及ぶムービー映像を作成。それを何処かのコンクールに出した結果、最優秀賞を取ったらしいのだ。
けれど、そんな未那月先生の破天荒っぷりに魅せられてしまう生徒は多く。その美麗な容姿と相まって、特に男子生徒からは絶大な支持を得ているのが現状であった。
「けど、不思議だよな。ＰＴＡや教員委員会の目がやたらと厳しいこのご時世に、どうして未那月先生はお咎めなしなんだ？」
「そんなの私が知りたいくらいよ。理事長の孫娘だとか、実は学界でも指折りの天才だとか、色んな噂は飛び交ってるけど、どれも信憑性は定かじゃないし」
「ふーん……じゃあさ、〈エクステンド〉や怪獣を調査する為にやって来たどっかのエージェントだったり！」
「バカ。だったら、どうしてそんなエージェントが何の変哲もない私たちの学校に潜入して、変人養護教諭のフリをしているのよ？」
陽真里の正論を受けて、透真も我に帰ってきた。確かに、今の仮説は自分でも「ないな……」と思ってしまう。
そんなことを考えている間に、向こうでは〈エクステンド〉がザリガニ怪獣の触角をへし折っていた。
背面に備えられたブースターが蒼炎を吐き出して、振り上げられたハサミを回避。さらに流れるようなモーションで、鋼鉄の拳をねじ込んでみせた。
「あっ、」
きっと、それが決まり手になったのであろう。
頭を潰されたザリガニ怪獣は電池が切れたように動かなくなり、〈エクステンド〉もほんの数秒静止すると、空の彼方に飛び去ってしまった。
今回も自衛隊の調査チームが消えた〈エクステンド〉の行方を追うのだろうが、それも結局は徒労に終わってしまうのだろう。
「今月はやけにあっさり勝ったな」
「五、六限も潰れねーじゃん」

なんて愚痴りながら廊下に出ていた生徒たちも教室へと戻って来た。
「はぁ……あの〈エクステンド〉ってロボットは、どうして私たちの日常に現れたのかしら？」
そんな風に陽真里がうんざりするのも当然だった。
わざわざプラモデルを手に入れるほどなのだから、当然透真だって〈エクステンド〉の正体に関しては様々な仮説を立てた。
あの怪獣は地球侵略にやって来た宇宙人の尖兵で、〈エクステンド〉はそれに対抗すべく天才博士の作り上げた人類の叡智の結晶だとか。
遠い未来から人類滅亡を防ぐ為に送られて来たオーバーテクノロジーだとか。
果ては異世界や並行世界からやって来たのではとも考えたが、所詮はオタク少年の妄想の域を出ないのだ。
「別に何だって良いだろ。今回だって俺たちの街を護ってくれたんだし、カッコいいんだから、それで充分だ」
結局、謎は謎のまま。
透真にとっての凡庸な日常は、今日もまた過ぎてゆくのだった。

02

放課後。透真（とうま）はバスに揺られながら、隣町を目指していた。
唯一の悪友から「遊びにいこーぜ！」と誘いのメッセージが届いたのだ。
『集合場所はいつものゲーセンでいいよな？』
そこまでのＬＩＮＥを打ち終えた透真は、前の車窓へと視線を移す。
前方を進むのは迷彩色を纏うトラックだ。さらに前方にも同じような車両が数段並んで、ちょっとした渋滞を作っていた。
三年前、初めて〈エクステンド〉が怪獣を倒した際に、残された死骸をどうするかが問題となった。二〇メートルを裕に超える巨大生物の死骸を放置出来るわけがない。さらには各国の研究機関がこぞって怪獣の死骸を欲しがり、外交問題一歩手前の大騒ぎへと発展した。
しかし、その問題は意外な形で解決を迎えることになる。倒された怪獣の死骸が、何の変哲もない砂塵になったのだから。
当時の研究者たちはこぞって度肝を抜かれたことであろう。
「怪獣を構成していた筋繊維や骨格が、何の変哲もない砂塵になる訳がない」というのが研究者たちの総意であったが、事実としてその現象が起こったのだから、彼らも口を噤むことしか出来なかった。
これも〈エクステンド〉や怪獣の正体が謎のままである要因の一つであるが、それでも街に残された砂塵は、誰かが回収して処理しなくてはならない。
「多分、連中の行き先も隣町なんだろうな」

あのトラックは街に降り積もった砂塵を、然るべき機関へと運ぶためのものだった。もっとも最近は回収した砂塵を保管するスペースが足りなくなって、海洋の埋め立てなんかに使っているという噂なのだが……

『悪い。ちょっと遅れるかもしれねぇ』

そうＬＩＮＥを打てば、スタンプ画像と共に「へーい」とお気楽な返信が届いた。

まぁ、アイツのことだ。数十分くらいの時間は適当に潰すのであろう。

透真はＬＩＮＥを閉じて、各種ＳＮＳを開いた。そこで〈エクステンド〉と検索ワードを入れたのなら、昼間のザリガニ怪獣との奮闘を撮影した写真が山のようにヒットした。

中には、間近のローアングルで撮ったと思われるものや、機体各所のメンテナンスハッチや装甲同士の継ぎ目が見えるようなものまであった。

「やっぱり大きなメカは下から煽るように撮るのが、一番映えるよな♪」

いつもは「不謹慎！」とお説教をしてくる幼馴染様も、今日は委員総会らしく学校に残ったままだ。つまり、今の透真を邪魔するものは誰もいない。

お気に入りの画像をダウンロードし終えた透真は、ルンルン気分で鼻歌を奏でるのであった。

特に気に入ったものはプリントアウトして、完成した一／一〇〇〈エクステンド〉のプラモデルと一緒に飾るのも良いだろう。

そんなことを考えている間にも、少しずつ渋滞の列が緩和し始めた。

◇◇◇

迷彩トラック群は別ルートを使うようで、途中から見えなくなってしまった。そして、渋滞を抜け出たバスは間も無くして、駅前へと停車する。

そこから歩いて四、五分程度。透真は行き付けのゲームセンターにたどり着く。

自動ドアを潜れば、店内の忙しい喧騒が透真の心を踊らせた。

ざっと店内を見和せば、一際目立つスペースに設置された筐体の前で、忙しなくレバーとボタンを操作する男子生徒の姿を見つける。

「おっ、やっぱりここにいたな」

透真の羽織る学校指定の黒ジャケットとは真反対の白学ランは、進学校で知られる明王高（みょうおう）校のものだ。けれど透真は物怖じすることもなく、彼のゲーム画面を覗き込む。

画面の中で派手なエフェクトと共に映し出されるのは、〈エクステンド〉と怪獣の姿だ。

これは〈エクステンド〉を題材にリリースされた格闘ゲームなのだから、画面に〈エクステンド〉や怪獣が映ること自体に不思議はない。が、プレイヤーを示すカーソルの矢印には違和感があった。

矢印が怪獣の方を指しているのだ。

しかも白学ランの生徒が複数のコマンドを打ち込めば、ＮＰＣが操作しているであろう〈エ

クステンド〉のＨＰＧ（ヒットポイントゲージ）がガリガリと削られてゆく。

「あぁ、バカ！　そんなことしたら、〈エクステンド〉が……」

透真が発した悲痛な声も画面の中にまでは届かず、〈エクステンド〉が爆発のエフェクトと共に轟沈した。

画面にデカデカと表示されるのは「ＹＯＵ　ＷＩＮ」の文字。それを見届けた白学ランの生徒が得意げな笑みを浮かべて振り返る。

「どーよ、透真！　この俺様のスーパー天才プレイに掛かりゃ、最高レベルに設定したＡＩ相手も目じゃねーぜ！」

彼は鳥居十悟（とりいじゅうご）。透真の中学からの悪友であった。

オールバックに掻き上げられた髪と、猛禽のように鋭い瞳は相変わらず他者へ相応の威圧感を与えるものだ。けれども、十悟の浮かべる人懐っこい笑みは、それを帳消しにしてしまう。

寧ろ、爽やかなイケメンに見えてしまうのが若干ムカつくくらいだ。

「特に最後の決め技のコンボなんて見たかよ！　コイツを決めるために毎日一時間練習した甲斐があったってもんよ」

進学校の生徒が勉学や部活に精を出さず、放課後ゲーセンに通い詰めるのはどうかと思うが、十悟は昔からこういう奴なのだ。

自頭がいいからテストで困ったなんて、経験をしたこともないのだろう。

「あーもう、わかったから！」

ウザ絡みしてくる悪友を押し退けながら、透真は向かいの筐体へと腰かけた。そして五〇〇円玉を挿入すると真っ先に〈エクステンド〉を操作キャラに設定し、対人モードを選択した。

「おっ、いきなり俺様とやろうってか？」

「こっちは大好きな〈エクステンド〉が一方的にボコられるとこを見せられたんだ。一人のオタクとして黙ってられっかよ」

「あぁ、なるほど。けど、それはあまり賢い選択とは言えないぜ」

「んだよ……？」

「ＮＰＣが操作する推しが俺様に負けるより、自分で操作した推しが俺様に負ける方がショックもデカいだろうからよ」

十悟も操作キャラのカブトムシ怪獣を選択した。

投げ技を主体に設定されたカブトムシ怪獣は、遠中距離も対応したバランスタイプの〈エクステンド〉に対して不利となる。

きっと十悟なりの挑発なのだろう。

「上等だよ、その喧嘩買ってやる！」

透真の交友関係は限りなく狭く、その原因は中学時代に連んでいた不良仲間の殆どと縁を切ったせいであった。

縁を切った連中の中には、薬に手を出したというウワサがある奴や、少年院に入ったという奴までいるのだから、その選択に後悔はない。

けれど、十悟とだけは唯一、縁を切ろうと思えなかったのだ。

「ほらほら、ガードが甘いぜ」

「クソ！　キャラ相性なら〈エクステンド〉の方が有利だってのに！」

十悟は中学の頃から、成績も運動神経もズバ抜けていた。

絶対に口に出すつもりはないが、そんな姿に憧れてしまうのも必然であっただろう。

「このッッ……！」

そんな友人にゲームでくらい勝ちたいと思うのも、また必然であった。

画面の中の〈エクステンド〉はかなりダメージを食らったが、お陰で必殺技のゲージが溜まっていた。賭けに出るのなら一瞬だ。

「なぁ、十悟。お前の学校でも教えてもらえないことを一つ教えてやるよ」

「ほーう？　天才の俺様に何か教えられることがあると？」

透真は素早く筐体のレバーを弾き、必殺技と、そこから繋がるコンボのコマンドを挿入した。

「勝負事は何だって、ビビったら負けなんだよッ！」

筐体のスピーカーが一際に大きな打撃音を吐き出して、兜ムシ怪獣が画面の向こうまで吹っ飛んだ。〈エクステンド〉の連撃からのアッパーカットが炸裂したのだ。

「よっしゃ！　見たかよ、これが〈エクステンド〉の本気だ！」

「マジか……ははっ、この俺様から一本取るとはやるじゃねーの。けど、勝負は三ラウンド制、まだまだ喜ぶのは早いぜ？」

十悟はほんの一瞬目を丸くするも、すぐに余裕を取り戻して見せた。

「フン、だったら速攻で二ラウンド目も取らせてもらうだけだ！」

大丈夫。次のラウンドも同じようにコンボを繋げれば、兜ムシ怪獣に大ダメージが与えられる。

透真は勝機を確信していた。それでいて焦ってはいけないと、早まる気持ちを律してみせる。

けれど、十悟は不意に思わぬことを聞いてきた。

「ところでさ。お前はやっぱり幼馴染の陽真里（ひまり）ちゃん派なの？　それとも養護教諭の未那月（みなつき）先生派？」

「ブッッ――――!?」

全く予想外な角度からの質問に、透真は噴き出してしまった。

「なっ、……何だよ、いきなり！」

「だーから、お前は陽真里ちゃんと未那月先生、どっちが好みか聞いてるんだよ。案外二人とも有名なんだぜ。星宮（ほしみや）高校の二大美人ってことで、未那月先生に至ってはうちの高校にもファンクラブがあるほどだ」

昼間のように、普段から未那月先生の奇行を見せられている透真からすれば、ファンクラブを作る連中の気が知れなかった。

それに気になるのは、寧ろ――――

「ちなみに俺様は陽真里ちゃん派な。中学の頃は同じ生徒会の役員同士だったし」

「はぁ!?」

そういえばそうだったと思い出す。当時の十悟は不良であったにも関わらず、女子生徒からの多くの得票率を確立し、生徒会長の地位に登り詰めたことがあったのだ。

ちなみに陽真里は「十悟のアホを一人にしたら何をしでかすか分からん」との理由で、教師たちから半ば強制的に生徒会副会長の地位に押し上げられていた。

「なぁ、透真。幼馴染のお前が良いって言うのなら、俺様が陽真里ちゃんをデートに誘っても良いよな？」

「なっ、なんで、そこで俺の許可がいるんだよ？　大体、わっかんねーな！　ヒバチみたいな口煩いだけの女のどこが良いんだか？」

けれど、陽真里の横に十悟が並ぶ姿を想像して。それが何故だか、妙に面白くなかったのだ。

「はい、そこに隙あり！」

そんなことを考えていたからであろう。画面の中の〈エクステンド〉の動きが止まっていた。

当然、そんなチャンスを十悟が見逃すわけもなく。二ラウンド目は彼にあっさりと奪われてしまうのだった。

画面に大きく表示される「ＹＯＵ　ＬＯＯＳＥ」が尚のこと哀愁を際立たせる。

「……おい、十悟ッ！　俺を動揺させようとワザと変な質問をしやがったなッ！」

「それは言い掛かりだぜ。プレイヤー同士の駆け引きもゲームの醍醐味の一つだろうに」

向かいの筐体から顔を覗かせた十悟はニンマリとほくそ笑んでいた。

先程は人懐っこい笑みと評したが、訂正しよう。見る人間の（主に透真の）神経を逆撫でする悪辣な笑顔だ。

「ふふーん」

「よし、わかった。テメェを絶対泣かしてやる」

そう決意した透真が再び、力強く握ろうとした瞬間だ。

今日で〝三度目〟となろう轟音が空を裂いて、透真たちの鼓膜を震わせた。画面の外で、本物の〈エクステンド〉が再び、飛来したのだ――――

03